

桜ヶ丘ブロック 同和教育研修大会



9月28日に、若葉台小学校にて映画「カムイのうた」が上映されました。

この映画は、明治〜大正期にかけてアイヌ文化伝承者であり19歳で夭折した知里幸恵という実在の人物をモデルに描かれた作品です。この映画は、アイヌへの差別・学校教育での同化政策・アイヌ民族遺骨の盗掘問題など史実に基づき制作してあります。

上映に先立ち、「アイヌの人たちと共に歩むとつとりの会」代表の三谷昇さんから『映画「カムイのうた」を通して考えるアイヌの人たち―アイヌ問題の現状―』という演題で、アイヌの歴史、アイヌ民族を取り巻く現代の状況、人権侵害（差別）などの話を伺いました。

そして、「共に生きると

は、歴史を学び、認識を新たにすること。出会う機会を多くつくること。視点をかえること。」だと結ばれました。

参加者の感想

・どうしてこんなに悲しいんだろう。

それは、もし神様がおられるなら、この様な女性をこんなに若くに、一瞬に命の灯を消す様なこととはされなかつたらうと思うから。彼女は、命があれば、もつともつとたくさんの経験や意見や希望を書物にして残すことができただろうし、訴えていける力を持っていた。母もそんな彼女を一生かけて応援し、託して行こうと、若い娘を遠くに出したと思う。それは母の夢であつたらうし、訴えでもあつた。でも、あんな形で娘の死を知らされた。母の気持ちと思うと心をもぎ取られる。

後悔し、自分を責め娘を想い。母は立ち直れたのだろうか？

・映画のモデルとなつた知里幸恵氏の没後100年、本当ならば、先人の努力で、アイヌだけでなく異文化や異民族に対する日本人の差別意識や人権侵害はなくなつたと、胸を張って言える時代であるべきだが、残念ながらそうはなっていない。

逆に時代を遡るかのように、今は「日本人ファースト」なる言葉が叫ばれている。「日本人」を「和人」に置き換えれば、今の日本はアイヌの人々に同化政策を強制した時代と同じ空気になるつつあるように思える。

自分たちのアイデンティティーだけでなく、異文化や異民族のアイデンティティーを認めて、リスパクトできてこそ、差別やポピュリズムの意識をなくし、グローバリゼーション、ノーマライ

ゼーションの世界の中で、私たちは真の日本人として誇れるようになるのではないのでしょうか。

・アイヌという言葉は聞いたことがあつたが、あのような差別行為がおこなわれていた事を初めて知つた。今回このような機会がなければ知ることがなかつたのでよかつたと思う。

・アイヌの人々が理不尽な差別を受け、深い悲しみを抱きながらも、アイヌであるという事を誇りに思い、力強く生きてこられた事に、そしてユーカラの唄の美しさにとても心を打たれました。又、今でも尚、アイヌをルーツに持つ人々が自分の生い立ちを隠しながら生活しておられるという現実がある事にとても心が痛みます。

今、世の中には様々な差別が生まれています。私達は差別という事に対

し、もっと正しく理解をし、そして学び、一人一人が意識を変えることから差別や偏見のない、誰もが安心して暮らせる社会になることを願うばかりです。

この作品の意味、問いかけを改めて考えさせられたように思います。

明治32年公布の北海道旧土人保護法が廃止されたのは、平成9年になってからでした。今なお、1,600体以上もの遺骨が子孫に返還されていないといます。この映画を通して長く根深い差別の現実と搾取された時間を思い、強い憤りを覚えるとともに知ることの大切さを痛感しました。

